

二〇二四年七月二七日（土）金志玟

【原文】

天以至道爲行、地以至德爲行、至德爲家（二）、共生萬物（三）、無所匿、無可私（三）。古者（四）聖人象天地爲行、以至道要德力教化愚人、使爲謹良、令易治。〈令〉〔今〕世反多閉絶之（五）、故愚人共爲狡猾、爲失天道（六）、不自知非（七）、〈各〉〔咎〕在眞道善德不施行（八）、故人多天譎（九）、當死不除也。

【校勘】經…『太平經』卷九七「妒道不傳處士助化訣」（解人常所不宜聞所不宜言所不宜用斷邪出眞文）

- (一) 地以至德爲行、至德爲家…經作「地以至德爲家」。
- (二) 共生萬物…經作「共生萬物」。
- (三) 無可私…經作「無可私也」。
- (四) 古者…經作「故古者」。
- (五) 令…經作「今」。從此改之。閉絶…經作「閑絶」。
- (六) 狡猾…經作「猾」。爲失天道…經無「爲」字。
- (七) 不自知非…經作「不自知爲非」。
- (八) 各…經作「咎」。從此改之。
- (九) 故人多天譎…經作「故人多被天譎」。

【訓讀】

天は至道を以て行を爲し、地は至徳を以て行を爲し、至徳を家と爲し、共に萬物を生じ、匿す所無く、私すべき無し。古者は聖人、天地を象り行を爲し、至道要徳を以て力めて愚人を教化し、謹良と爲さしめ、治り易くせしむ。今の世反りて之を閉絶すること多く、故に愚人共に狡猾と爲り、（爲に）天道を失い、自から非なるを知らず、咎は眞道善徳の施行せざるに在り。故に人に天譎多く、死に當るも除からざるなり。

【譯文】

天は至道に基づいて運行し、地は至徳に基づいて働き、至徳を宗家とし、共に萬物を生成し、隠し嫌うことなく、私欲によって寵愛を施すこともない。古の聖人はこのような天地の働きに象つてものごとを行い、至道と要徳に基づいて、愚かな人々を教化して慎重で善良な人へと變化し、治りやすくすることに努めた。今の世は反對に道德の教化を途絶えさせることが多い。だから愚かな人びとが（悪人と）ともに狡猾となり、天道を失つてしまい、自分自身がよくないことに氣付かない。その咎は眞道と善徳を施行しなかったことにある。だから人々は天に罪をせめられることが多くなり、死んでも罪が免除されないのである。

【語注】

○共生萬物 『太平經』卷四八「天地中和同心、共生萬物」。『太平經鈔辛部』「天者常下施、其氣下流

也。地者常上求、其氣上合也。兩氣交於中央。：兩氣者常交用事、合於中央、乃共生萬物。」

○無所匿・無可私 『尚書』盤庚上「王播告之脩、不匿厥指」。注「王布告人以所脩之政、不匿其指」。

『太平經』卷三六「真人無匿此書、出之、使凡人自知得失之處」。卷三七「其後世學人之師、皆多絕匿其真要道之文、以浮華傳學、違失天道之要意」。卷一〇二「今私匿閉絕吾文、而不以時出之、天即且病子災子」。

○謹良 『史記』呂太后本紀「太后家薄氏謹良、且立長故順、以仁孝聞於天下」。『太平經』卷三七「善哉、子有謹良之意」。『太平經』卷四七「是故上古三皇垂拱、無事無憂也。其臣謹良、憂其君」。

○至道要德 『太平經』卷六七「凡人已得要道要德：夫要道、迺所以安君也、以治則得天心。夫要德、所以養君、以治則得地意」。卷九七「故自天地四時五行日月星宿、共以真道要德養萬二千物、下及六畜糞土草、皆被服其祕道要德而得以生長」。

○易治 『太平經』卷一一三「陽者、君也。陰者、臣也。君盛則臣服、民易治」。※『老子』六五「民之難治、以其智多」。

○天譴 『太平經』卷四九「天下大疾苦之、故使吾出此文……。真人實宜重慎之。且有天譴」。卷九七「愚生竊聞、祕道要意、是乃天地之珍寶、天下之珍奇物也。故名之爲至道不傳、其非凡人所宜聞・所宜言・所宜用也。而〈令〉〔今〕天師都開太平學之路、悉敕使人爲道德要文、不得蔽匿、皆言其有天譴、到死罪尚不除、復流後世」；「故夫要道道德、乃所以承天心而順地意、：而反禁絕、不化力化人、有譴於天、罪不除也」。※劉宋・劉敬叔『異苑』「元嘉三年、邵陵高平黃秀、無故入山、經日不還。其兒根生尋覓、見秀蹲空樹中、從頭至腰、毛色如熊。問其何故、答云、天譴我如此、汝但自去。兒哀慟而歸。逾年、伐山人見之、其形盡爲熊矣。」

○咎 『太平經鈔已部』「咎在陰陽氣戰鬥」、「大咎在此」等の用例多い。

【原文】

今天師廣開天道之路、悉拘校古者道書之文、以爲真要祕道。真道者多善、其文乃入神。故能觀※神、與神爲治、（所治）若神。入神（二）、則真道也。乃多成於幽室。或有使度於室中而去者、或有一出一入未能去者、或有但見神而終古不去者。

行、爲子道、學而得大官者決意。凡人〈專〉〔學〕問（二）也、今日入學門、用心專一、常欲利愛（三）而不妄語、年少而學、至老窮、無復知乃止、不樂得官也。但身好學、務欲知經道（四）、積爲善而不止。行名立、經道成、深知古今災變所從起。其行與學、有益於上、有利於下。爲善積聞、不可蓋閉（五）、名聞四達。明王好之、因而徵索詔取（六）、萬俱言「善哉」（七）。是其人也、傍人爲其悅喜。〈足〉〔是〕者（八）、即其善人學而度世者也。

【校勘】經…『太平經』卷九八「神司人守本陰祐訣」第一百五十六

※ 觀…經皆作「睹」、以下皆同。

- (一) 若神入神…經作「所治若神入神」。
- (二) 專問…經作「學問」、從此改之。
- (三) 利愛…經作「祐利愛」。
- (四) 務欲知經道…經作「務欲得知經道」
- (五) 蓋閉…經作「闔閉」、從此讀之。
- (六) 詔取…經作「召取」。
- (七) 萬俱言善哉…經作「百姓俱言善哉、俱言大吉」。
- (八) 足者…經作「是者」、從此改之。

【訓讀】

今天師廣く天道の路を開き、悉く古者の道書の文を拘校し、以て眞要祕道と爲す。眞道とは多善、其の文は乃ち神に入る、故に能く神を覩、神と與に治を爲し、（治る所）神の若し。神に入るれば、則ち眞道なり。乃ち幽室に成ること多し。或は室中を度して去らしめる者有り、或は一たび出で一たび入り、未だ去る能わざる者有り、或は但だ神を見るのみにして終古に去らざる者有り。

行し、子のために道わん、學びて大官を得る者の決意を。凡人の學問たるや、今日に學門に入り、心を用いること專一とし、常に利愛せんと欲して妄りに語らず、年少くして學び、老窮に至るも復た乃ち止むを知る無く、官を得るを樂わざるなり。但だ身から學を好み、務めて經道を知らんと欲し、積みて善を爲して止まざるのみ。行名立ち、經道成れば、深く古今災變の從りて起る所を知る。其の行と學、上に益有り、下に利有り、善を爲すこと聞を積み、蓋閉すべからず、名聞こゆること四達す。明王之を好み、因りて徵索して詔取し、萬俱に善なるかなと言う。是れ其の人たるや、傍の人其の爲に悦喜す。是の者、即ち其の善人の學びて度世する者なり。

【譯文】

今天師は天道へ通じる道をくり廣げ、古代の道書の文辭をすべて集めて校勘し、それによつて祕密とされていた眞正で重要な道を正本とした。眞の道というものは善果をもたらすことが多く、その經文は神の次元に入っている。だから神々を見きわめることができ、神々とともに（世の中を）治め、（その治りは）神わざのようである。神の次元に入っているからこそ、眞の道である。それはすなわち人目にあたらぬ幽暗の空間において成道することが多い。ある場合は、室内において（この世を）超脱して仙去させることもあれば〔天仙〕、一度出て行つてはまた入り、まだ仙去することができない場合もあり〔地仙〕、ただ神を見るだけで最後まで世を去らない場合もある〔不死〕。

よいであろう、そなたのために語ろう、道を學んで（世のために）大官となり得るものの決意を。凡人の學問とは、今日に道を學ぶ門戸に入ったならば、心を用いること專一とし、常に（百姓を）愛し役にたとうと思ひ、嘘偽・デタラメを言わず、若いときから學んで、老いはてる時になつても（學問とその實踐とを）止むことを知らず、官職を得ようと願わないのである。ただみずから學問を好み、經道（經典に書かれた道）を理解しようと努力し、善行を積み重ねてやまないのです、その行爲と名聲は立派になり、經道は成し遂げられ、過去より現在にいたるまで災變の起る原因を深く洞察できるようになる。その善行と學問は、上は帝王の政治に役に立ち、下は民に利益をもたらす。その善行の噂はひろがり、かくしふせぐことはできず、その名聲は四方に聞こえる。道に明るい帝王はこのような人材を好み、探し求めて召取り、萬民がそろつて「善なるかな」と言い讚えるのだらう。このような人は、周りの人々がそのために喜びあげる。このような人が、すなわち善人のなかで道を學んで世を渡るものである。

【語注】

○拘校 『太平經』卷四一「拘校上古中古下古聖人之辭以爲聖經也、拘校上古中古下古大德之辭以爲德經

也、拘校上古中古下古賢明之辭以爲賢經也」。

○去 『太平經』卷九八「夫度去者、萬未有一人。大壽者、千未有一人也。」

○決意 『太平經』卷七二「不問則令後世不得知天道之意決。」卷二一六「天上皇平洞極之師、爲天加一言、重解決其意也」。卷九一「故當問其解決意」。卷九三「願及天師決其意。」

○學問 『太平經』卷四十「人或生而不知學問、遂成愚人」。卷六七「夫天生人、幸得有賢知、可以學問而長生」。卷九八「凡天下之人學問也、萬未一人得上官也、千未一人得中官也、百未一人得小官也」。卷一一九「凡人學問、各爲身計、務順天道」。

○大官 下文「帝王之良臣」、「天官」之意。『太平經』卷六七「因爲德行、或得大官」。卷七一「有天命者、可學之、必得大度。中賢學之、亦可得大壽、下愚爲之、可得小壽。子欲知其效、同若凡人學耳。大賢學可得大官、中賢學者可得中官、愚人學者可得小吏」。

○利愛 『墨子』大取「仁而無利愛、利愛生於慮」孫詒讓問詁「凡愛利皆生於自私之心、不足爲仁也」。(下文) 『太平經』卷九八「行、復爲子說道、其不度者意、……、不尊重上、不利愛下」。

○至老窮乃止 『禮記』祭義「居鄉以齒、而老窮不遺」。正義「老窮不遺、以鄉人尊而長之」。『太平經』卷九八「以年一知道之後、常爲上善、務利而不害傷、求道爲善、到年窮乃止」。卷一一〇「生以年窮盡乃止。『太平經鈔乙部』其失道意、反求之四野、索之不得、便至窮老矣」。

○行名 『莊子』大宗師「行名失己、非士也」。王先謙集解「必所行求名而失己性、非有道之士」。

○積聞 『太平經』卷六七「名聞國中」。

○經道 『太平經』卷四九「故吾今力救教以大仙經道、纔開其壽階耳。學人以德、纔使其仁」。卷五〇「經道凡書記前後參錯、爲天地談」。卷七〇「爲經道而日興盛者、是也。不日向興、反日向衰者、行內失其意者、非也。是故夫天地之性、爲善」。

○詔取召取 『太平經』卷六七「爲善不止、大賢明舉之、名聞國中、四海人道之者塞道。明王聖主聞之、見助養民大喜、因而詔取、位至鼎輔、因是得尊貴」。

○度世 『太平經鈔乙部』「上壽一百二十、中壽八十、下壽六十。百二十者應天、八十者應陰陽、六十者應中和氣。如行善不止、過此壽、謂之度世」。『太平經』卷四九「上士得吾道、學之不止、可爲國之良臣、久久得其要意、可以度世」。※『太平經』卷七一「真道九首」其上一元氣無爲者、念其身也、無一爲也、但思其身洞白、若委氣而無形、常以是爲法、已成則無不爲無不知也。∴得道則變易成神仙。而神上天、隨天變化、即是其無不爲也。其二爲虛無自然者、守形洞虛自然、無有奇也。身中照白、上下若玉、無有瑕也。爲之積久、亦度世之術也」。

【原文】

行、復爲子說道、其不度者意。今日入學門、不樂思得真道善說。但欲博聞多觀※、可以行窮極聖人者。又不欲(一)推行作善、反好浮華之文、可以相欺偽者。或既得入經道、又用心不專一、常欲妄語、辯於口辭、以害人爲職、不尊重上、不利愛下。復經道空虛(二)、未足以爲帝王之良臣、反行(首)〔守〕長者(三)。傍人以財貨自助、欲得大官、以起名譽、因而盜採財利、以公趣私、背上利下。是即亂賊敗正治、天地之害、國家賊也(四)。民之虎狼父母之惡子(五)。天地憎之、鬼神惡之。故其罪當誅之於帝王(六)、以稱天心、以解民之大害(七)。是其抵欺(八)而得官者也。或有用心不專、實空虛無真守、反積常思欲得官。官者、天之列宿官也(九)、以封有德、賞有功也。不以妄與(十)無功之人也。無功之人、天地所忽、神靈所不愛也(一一)。下愚不能深自知惡、反妄思得天官而不止、邪鬼物因而共入(一二)其心、使(一三)妄語、因而妖言、而不能自禁止也。故時有「邪言而死」者、此之謂也。非獨爲道、不得其意則凶也。(一四)真人努力、自度之術矣(一五)。

【校勘】經・『太平經』卷九八「爲道敗成戒」第一百五十七

- (一) 欲・經作「樂」。
- (二) 復經道空虛・經作「其行與經道實空虛」。
- (三) 首長者・經作「守長者」。
- (四) 國家賊・經作「國家之賊」。
- (五) 惡子・經作「惡子也」。
- (六) 故其罪當誅之於帝王・經作「故其罪泄見者、時時見誅於帝王」。
- (七) 經有「也」字。
- (八) 抵・經作「工」。
- (九) 天之列宿官也・經作「乃天之列宿之官也」。
- (十) 與・經作「予」。
- (十一) 愛・經作「好愛」。
- (十二) 入・經作「下」。
- (十三) 經有「其」字。
- (十四) 經有「凡人爲行、不欲樂善、爲悉凶也」之句。
- (十五) 自度之術矣・經作「子幸有善意、常欲愛利爲事、已度矣」。

【訓讀】

行し、復た子の爲に道を説かん、其の度せざる者の意を。今日學門に入り、眞道・善説を得るを樂い思わず、但だ博く聞き多く觀、以て行い聖人を窮極すべけんと言ふ者あり。又た行いを推し善を作さんと欲せず、反つて浮華の文を好み、以て相い欺偽すべき者あり。或は既に經道に入るを得るも、又た心を用いること專一とせず、常に妄語を欲し、口辭を辯じ、以て人を害するを職と爲し、上を尊重せず、下を利愛せず。復た經道に空虛たり、未だ以て帝王の良臣と爲すに足らず、反つて首長を行ふ者あり。傍人財貨を以て自助し、大官を得て、以て名譽を起さんと欲し、因りて財利を盜み採り、公を以て私に趣き、上を背き下を利す。是れ即ち亂賊にして正治を敗す、天地の害、國家の賊なり。民の虎狼、父母の惡子たり。天地之を憎み、鬼神之を惡む。故に其の罪は當に之を帝王に誅し、以て天心に稱い、以て民の大害を解くべし。是れ其れ抵欺して官を得る者なり。或は心を用いること専らにせず、實空虛にして眞守する無く、反つて積ねて常に官を得んと思ひ欲するもの有り。官とは、天の列宿の官のごときなり、以て有徳を封じ、有功を賞するなり。以て妄りに無功の人に與えざるなり。無功の人、天地の忽にする所、神靈の愛せざる所なり。下愚 深く自から惡を知る能わず、反つて妄りに天官を得んと思ひて止まざれば、邪の鬼物因りて共に其の心に入り、妄語させ、因りて妖言し、而して自から禁止する能わざるなり。故に時に「邪言して死する」者有るは、此れ之を謂うなり。獨り道を爲すのみに非ず、其の意を得ざれば則ち凶なり。眞人努力するは、自度の術ならん。

【譯文】

よかろう、またそなたのために道について説くことにしよう、この世を渡ることができないことの意味を。今日道を學ぶ門戸に入ったのに、眞の道・善い説法を得ようとおもひ願わないのに、ただ見聞を博げ多くすることによって、聖人の役を極めようとするものがい

る。また實踐を推しすすめ、善行をしようと思わず、反對にうわべばかりきれいな文章を好み、それによって人々を欺くものがある。ある場合は、すでに經道に入門できたのに、また心を用いることを專一とせず、いつも嘘偽りデタラメを欲しがり、口先ばかりのことを言い、それによって他人に害をあたえることに務め、上の人を尊重せず、下の人を愛し役に立とうとしない。また經道において信實でなく空虚であり、まだ帝王の良い臣下となれないのに、反って民の守長をするものがある。周りの人びとも財貨を使って自分を助け、大官を手に入れ、それによって名譽を起さんと欲し、（いつわりの名聲で）財利を盗み採り、公共のものを私欲のためにまわし、上を裏切って下（自分）の利欲をみたま。このよきな人はすなわち亂賊であり、政治をダメにする、天地の害蟲、國家の逆賊なのである。民にとっては虎狼、父母にとっては不肖ものである。天地はそのような人を憎み、鬼神はそのような人を惡む。だからその罪は帝王がこれを誅殺し、それによって天心に稱わせ、民の大事を除去すべきである。これらは、詐欺をして官を得たものである。ある場合は、心を用いることを專一にせず、實質は空っぽで眞に道を守ることなく、反對に常に官位を手に入れようと思いがうものがある。官とは、天の列宿の官のようなものであり、有徳の人に封し、有功の人に賞とてあたえるものである。それを妄りに無功の人にあたえてはならない。無功の人は、天地が大事にしないもの、神靈が愛しないものである。下愚は自分自身の悪いことを深く理解できないので、反って妄りに上等の官を手にいれようと考えてやまない。すると、邪の鬼物がその人の心に入りこみ、妄語をさせる。それによって妖言をはき、自分で禁止することができなくなる。だから時おりに「邪言して死ぬ」ものがあるが、それはすなわちこのことをいう。ただ道を實行するだけではなく、道の本意に合致しなければ、それこそ「凶」なのである。眞人が努力すべきことは、自からを超脱させる術であろう。

【語注】

○行窮極聖人 『太平經』卷三六「故陰陽者、傳天地統、使無窮極也。君臣者、治其亂、聖人師弟子、主通天教、助帝王化天下」。卷九八「見天地之道、獨不知窮極」。是故陰陽之道、從天上盡地下、旁行無窮極」。

○推行作善 『太平經』卷七十三至八十五「天地與聖明所務、當推行而大得者、壽孝爲急」。卷一一二「故當作善、有益於天」。

○經道 『太平經』卷七三「入室獨居、思經道之本、所須出入。賢者先得其意、其次隨之、遂俱入道、與邪相去矣」。卷九一「夫邪言邪文以說經道也、則亂道經書。道經亂、則天文地理亂矣。天文地理亂、則天地病矣」。

○浮華之文 『太平經鈔甲部』「書有三等、一曰神道書、二曰覈事文、三曰浮華記。：浮華記者、離本已遠、錯亂不可常用、時時可記、故名浮華記也」。『太平經鈔乙部』「古之學者以安身、今之學者浮華文」。『太平經』卷三七「其後世學人之師、皆多絕匿其眞要道之文、以浮華傳學、違失天道之要意」。

卷三九「浮華之文、不能久活人也」。

○辯於口辭 『論語』公冶長「禦人以口給、何晏集解引孔安國「佞人口辭捷給」」。

○首長↓守長 『後漢紀』吳漢傳「鬲縣五姓反、逐其守長」。

○背上利下 『太平經』卷三六「不敬其陽、反敬其陰、名爲背上向下、故有過於天也」。

○惡子 『潛夫論』述赦「輕薄惡子、不道凶民、思彼姦邪、起作盜賊」。『太平經』卷六七「或有愚人、

…恣情而行、上犯天文、下犯地理、出入無復節度、歸則不事父母、群愚相與會聚、遂爲惡子」。

○抵欺 『周禮』春官・典瑞「四圭有珌」。鄭玄注引漢鄭司農曰「邸、讀爲抵欺之抵。」『太平經』卷一
一一「爲善不行侵人、無所欺抵」。

○實空虛 『太平經』卷七三至八五「賢明智迺包裹天地、積書無極、而不能自壽益命、此名空虛、無實道也」。「然天下人本生受命之時、與天地分身、抱元氣於自然、不飲不食、嘔吸陰陽氣而活、不知飢渴。久久離神道遠、小小失其指意、後生者不得復知、眞道空虛、日流就僞、更生飢渴、不飲不食便死」。

○列宿 『太平經』卷八六「夫列宿者、善正星也」。

○邪鬼物 『太平經鈔乙部』「多病鬼物者、天地神靈怒也」。『太平經』卷七二「今承負之後、天地大多災害、鬼物老精凶殃戶咎非一」、「鬼物大邪、共爲盜賊」。

○邪言而死 『太平經』卷五一「正言詳辭必致善、邪言凶辭必致惡」。卷九一「邪言邪辭邪文而有病」。

○自度之術 『太平經』卷九八「眞人努力、子幸有善意、常欲愛利爲事、已度矣。…子已知自度之術矣、吾無以加之也」。

【原文】

古者聖賢、觀_※天法明、故能行道守德也。天乃專一、晝夜行道而不言、故能長吉(一)。地乃晝夜行道而不言、愛養萬物、故能獨吉(安)也(二)。四時(三)晝夜行道而不言、故能常獨興王而不止也。三光乃獨行眞道而不言、故能常明、隨天運行也。五行乃獨行眞道而不言、故能與天地爲常也。凡天下之爲道者(四)、象此不可勝書也。常(五)能愛利、口不妄言、則道可得也。欲輕忽(六)反吾言者、爲道所賊也(七)。吾乃爲天譚(八)、以戒上德之君。夫德君、天之興(九)、必且好道、萬民(十)且象其君而爲之、皆以此文爲戒(一一)。

【校勘】經『太平經』卷九八「爲道敗成戒」第一百五十七

- (一) 長吉…經作「獨吉也」。
- (二) 獨吉…經作「長獨安也」。
- (三) 經有「乃」字。
- (四) 爲道者…經作「爲道行者」。
- (五) 常…經作「故」。
- (六) 忽…經作「忽事」。
- (七) 爲道所賊也…經作「成□□爲道所賊、萬不失一也」。
- (八) 天譚…經作「天談」。
- (九) 天之興…經作「天興之」。
- (十) 萬民…經作「百姓」。
- (十一) 戒…經作「大戒」。

【訓讀】

古者の聖賢、天法を觀ること明けし、故に能く道を行い徳を守るなり。天は乃ち一を専らにし、晝夜に道を行いて言わず、故に能く長えに吉なり。地は乃ち晝夜に道を行いて言わず、萬物を愛養す、故に能く獨り吉(安)なり。四時は晝夜に道を行いて止まず、故に能く常に獨り興王して止まざるなり。三光は乃ち獨り眞道を行いて言わず、故に能く常に明らかなり、天に隨いて運行するなり。五行は乃ち獨り眞道を行いて言わず、故に能く天地と與に常を爲すなり。凡そ天下の道を爲す者は、此に象ること書するにたうべからざるなり。常(故)に能く愛利し、口妄言せざれば、則ち道は得べきなり。輕忽し吾が言に反せ

んと欲する者は、道の賊する所と爲るなり。吾乃ち天譚を爲し、以て上徳の君を戒む。夫れ徳君は、天之を興す、必ず且に道を好み、萬民且に其の君に象りて之を爲し、皆な此の文を以て戒と爲す。

【譯文】

古代の聖賢は、天法の明確に觀察したので、道を行い徳を守ることができた。天はすなわち專一として、晝夜に道を行って黙々と（その功績を）言わない。だから長しえに吉となりえる。大地はすなわち晝夜に道を行って言わず、萬物を愛し養いそだてる。だからとりわけ（吉であり）安定である。四時は晝夜に道を行ってやまない。だから常に旺盛にはたらいてやまない。三光はすなわちとりわけ眞の道を行って言わない。だから常に明るく光り輝き、天に随って運行することができる。五行はすなわちとりわけ眞の道を行って黙々と言わない。だから天地とともに恒常な作用ができる。

天下において道を行う存在が、これらをモデルにしていることは、書ききれないほどである。常に（萬物を）愛して利益をもたらし、口は妄言をしなければ、道は得られる。輕率にこのことを忽せにして、吾が言に違反しようとするものは、道に罰せられる。吾はすなわち天談をして、上徳の君を教え戒めているのである。有徳の君主なら、天がそれを興隆させるので（君主は）必ず道を好み、萬民はまたその君主をモデルとして道を行うのであり、すべてここに書かれた文章を戒めとする。

【語注】

○天法 『太平經』卷三五「然天法、陽數一、陰數二」。卷四四「天法、神哉神哉！是故、夫古者神人眞人大聖、所以能深制法度。爲帝王作規矩者、皆見天文之要、乃獨內明於陰陽之意」；「夫爲帝王制法度、先明天意、內明陰陽之道、即太平至矣」。卷四八「已得天法、帝王象之以治」；「故天法、皆使三合迺成。故古者聖人、深知天情、象之以相治。故君爲父、象天。臣爲母、象地。民爲子、象和」。

○行道而不言 『老子』第二章「是以聖人處無爲之事、行不言之教、萬物作焉而不辭」；第七章「天之道、不言而善應」。『論語』陽貨「天何言哉、四時行焉、百物生焉、天何言哉」。

○天譚 天談 『太平經』卷四九「今吾乃爲天談、當悉解天地開闢以來承負之責：上壽之術、上善之路」。卷五一「今凡書文、盡爲天談」。卷八六「人生於天地、乃背天地、斷絕天談、使天有病：天談不得通、天地大怒、賊殺凡物」。卷九〇「吾辭則天談地語也」。

○興王（興旺） 『太平經』卷五六至六四「吾已悉傳付眞法語於子。：爲天除咎、以救至徳、以興王者」。「水、太陰也、民也、反使興王、傷損陽精」。卷六九「土王則金相、復相隨騰而起、己與辛之氣、俱得興王、騰而大起」。

【原文】

是故天之爲象法也、乃尊無上、反卑無下、其大無外、反其小無內（一）、包養萬物（二）、善惡大小、皆利祐之。受（三）以元氣、而生之終之、不害傷也。故能爲天、最稱神也、最名（天）（無）上（四）之君也。今上皇氣至、徳君治、當象此爲法。故吾道一高一下、一沈一浮、欲使衆賢共策之（五）。故東南地戶、乃有天地之水（六）、不逆小流之力也。善惡大小、皆歸之。眞人知之耶？

【校勘】經…『太平經』卷九八「爲道敗成戒」第一百五十七

- (一) 其大無外、反其小無內…經無「其」字。
- (二) 萬物…經作「萬二千物」。
- (三) 受…經作「授」。
- (四) 天上…經作「無上」、從此改之。
- (五) 共策之…經作「共察之也」。
- (六) 天地之水…經作「柱天之水」。

【訓讀】

是の故に天の象法を爲すは、乃ち尊きこと上無く、反りて卑きこと下無く、其の大は外無く、反りて其の小は内無く、萬物を包養し、善惡大小なりとも、皆な之を利祐し、受くるに元氣を以てし、而して之を生じ之を終らせ、害傷せざるなり。故に能く天と爲り、最も神と稱するなり、最も無上の君と名くるなり。今ま上皇の氣至り、徳君治り、當に此に象り法を爲すべし。故に吾道は一高一下、一沈一浮、衆賢をして共に之を策せしめんと欲す。故に東南は地戸たり、乃ち天地の水有り、小流の力に逆らわざればなり。善惡大小皆な之に歸す。眞人之を知らんや？

【譯文】

このような理由で、天の「象法（象るべき法則）」を示すありさまは、すなわち尊いことはこの上無く、反って卑いことはその下が無く、その大きいことは外無く、反ってその小さいことは内無く、萬物を包養して養い育て、善も悪も大も小も、すべてこれらに利益をもたらし、守り助ける。元氣をあたえて、萬物を生成しては終わらせ、傷害をあたえない。だからこそ天となることができ、最も神々しいとたたえられ、とりわけ「無上の君主」と名づけるのである。今は上皇の氣が到来し、徳君が世の中を治めているので、このような天をモデルにして法則とすべきである。だから吾が道は、高まっては低まり、浮き沈みを取りかえずので、賢人たちをあつめて共に策を練り上げるようにしたのだ。だから東南の方は地戸となり（低いので）、天地の水が集まるが、それは小流の力に逆らわないからである。善惡と大小なる存在も、すべてここに歸する。眞人はこのことを理解したのだろうか。

【語注】

○象法（象魏） 『管子』 版法「法天合徳、象法無親、參於日月、佐於四時」。『太平經』卷九三「古者聖人治常象天、不敢象地也。願聞之、何謂爲象天乎？象天者、聚仁賢明儒道術聖智、此者名爲象天也。聚財貨小人不肖無知文章、名爲象地也」。卷六五「天法垂象、上古聖人常象之」。卷七一「第一元氣無爲者、念其身也、無一爲也、但思其身洞白、若委氣而無形、常以是爲法、已成則無不爲無不知也。…元氣無爲象也」。※王巾「頭陀寺碑文」（『文選』卷五九）「正法既沒、象教陵夷」。李善注「曇無羅讖曰、釋迦佛正法住世五百年、像法一千年、末法一萬年」。

○東南地戸 『淮南子』 天文訓（列子・湯問）「昔者共工與顓頊爭爲帝、怒而觸不周之山、天柱折、地維絕。天傾西北、故日月星辰移焉。地不滿東南、故水潦塵埃歸焉」。『太平經』卷六五「今願請問東南、陽也、何故爲地戸？今西北、陰也、反爲天門？然、門戸者、迺天地氣所以初生、凡物所出入也。是故東南、極陽也、極陽而生陰、故東南爲地戸也。西北者爲極陰、陰極生陽、故爲天門」。

【參考①】『太平經』卷九七「妒道不傳處士助化訣」第一百五十四

「眞眞愚暗日益劇不曉大不達之生謹再拜，問一從事，言之必爲過，不問又患心不能獨自解。」「行、言之。」「愚生竊聞祕道要意，是乃天地之珍寶，天下之珍奇物也。故名之爲至道不傳，其非凡人所宜聞所宜言所宜用也。而今天師都開太平學之路，悉敕使人爲道德要文，不得蔽匿，皆言其有天謫，到死罪尚不除，復流後世，皆授以眞道祕德，曾不大哉？令小人與君子不別，愚生以爲眞道祕德，不宜使小人聞小人言小人之也。」「咄噫！子今且言，有萬死之責於皇天后土，不復除也。自天地開闢以來，後生日益薄妒道，小人斷絕天地之珍寶，以是爲失積久。故生承負，令天災不絕。常使天地內獨歲不平安，災變盜賊衆多，國家爲其愁苦，正起於是。子今且所言是，正是也。亂天反地，使治昏憤，民難治，正是也。子今且語，正與天爲重怨，錯哉錯哉！亡子功矣。」「何謂也？」「今要道善德出之以教化，小人得之守道德，更相做學，不敢爲非。其中小賢得善道德，可爲良順之吏。其中大賢，可上爲國家輔。其中最下極無知者，猶爲善人。夫天以要眞道生物，乃下及六畜禽獸。夫四時五行，乃天地之眞要道也，天地之神寶也，天地之藏氣也。六畜禽獸皆懷之以爲性，草木得之然後生長；若天不施其要道焉，安能相生長哉？而眞人言，小人不宜聞要道，不宜言，不宜用也。天地之神保終類，人乃不若六畜草木善邪哉？眞人自知，今且言有萬死之罪，不復除也。」「愚生事師日少淺，不深知天道，見天師言，乃自知罪重，上負皇天，下負后土，中負於大德之君。」「然子退自責是也。凡舉事可不慎乎哉？皇天常獨視人口言，何故使響隨人音爲吉凶，故響應不失銖分也。子獨不常觀此天地之音證邪？宜自慎不及，勿彊妄語，其爲害重。子今且言至道不傳人，何以傳知之乎？終類至道不可傳，天道無私，但當獨爲誰生乎？」「弟子自慎戒事甚無狀。」「子欲若俗夫小人復相教妒天道耶？」「不敢不敢。」「眞人自精戒事，天怒一發，罪過著不復除也。天道正由此言廢毀，子復共增之耶？帝王所以不能理其治而嘗多災者，但由盡若子。今且可言，因使眞道道絕也，邪道起，故不可理也。寧曉心解不乎？」「唯唯。」「已覺矣，慚負天師不也。常常慎事。」「唯唯。今念每言有過，欲不言也，又不知。」「平言。」「今人所不宜聞，所不宜言，所不宜用者，何等也？」「然，凡人乃不宜聞非眞要道，非眞要德。是故夫下愚之師，教化小人也，忽事不以要祕道眞德教之，反以浮華偽文巧述示教凡人。其中大賢得邪偽巧文習知，便上共欺其君；其中小賢得習偽文，便成猾吏，上共佞欺其上，下共巧其謹良民；下愚小人得之，以作無義理，欺其父母，巧其鄉里，或成盜賊不可止。賢不肖吏民共爲姦偽，俱不能相禁絕。睹邪不正，乃上亂天文，下亂地理，賊五行所成，逆四時所養，共欺其上，國家昏亂，其爲害甚甚，不可勝記。眞人反言小人不宜聞要道要德，反當以邪巧偽之事教化，使天下人眩暝，共習偽非，而不自知，遂俱爲無道耶？是以眞人有萬死之罪，不復除也。天下所不宜聞，所不宜言，所不宜用，正不宜聞此偽文，邪巧大猾所生正由此。故吾爲天陳法，爲德君作教，不敢及之，所以專開道德之門，而閉絕狡猾階路也。故吾書本道德之根，棄除邪文巧偽之法，悉不與焉。子獨不怪之耶？是乃天地以爲病，帝王以爲害，行復爲眞人具說之，其以要道德以教化小人也。上賢得以守儒良，中賢德以上爲國家至德之輔臣，其中小賢，化爲順善之吏，其中下愚，猶爲謹民，不知相害傷。故自天地四時五行日月星宿，共以眞道要德養萬二千物，下及六畜糞土草，皆被服其祕道要德而以得生長。今若以眞人今且言終類，此人不若六畜及糞土草耶？子今且言，寧自知有萬死之過不除邪？」「有死過，有死過。勿謝同不解耳。今過言當奈何哉？」「今欲解此過，常以除日於曠野四達道上四面謝，叩頭各五行，先上視天，迴下叩頭於地。」「唯唯。今且天師教愚生，何一急也？」「然所以急者，不以故眞人也。乃眞人言，得天地之忌。太上中古以來，人教化多妒眞道善德，反相教逃匿之，閉藏絕之，反以邪巧道相教，導化愚人，使俱爲非。其中大賢遠去避世，獨其中小賢爲吏，無有眞道，亂其民。其中下愚，因爲無道，起爲盜賊。民臣俱爲邪，聚蚊成雷動，共逆天文，毀天道，逆地意，反四時氣，逆五行。使災怪億億，三光失其正明，帝王大愁苦之，得昏亂焉，治不得平安，正由此也。故眞人寧知此罪重不？天不除之也。吾不教，子當謝也。故所以當於曠野者，當於鮮明地。所以四達道上者，道者主通事。所以四達者，當付於四時。天之使氣也，且爲子上通於天也。四時者，仁而生成，且解子過於天地也，後有過者，皆象子也。天從今以往，大疾人爲惡，故夫君子乃當常過於大善，不宜過於大惡。慎之慎之！子尚若此，何況於俗人愚哉？相教嫉妒道，藏匿之是也。子所言常善是。今且一言，名爲大逆天地，從古到今，人君所得愁也。然眞人前，人安得生爲君子哉？皆由學之耳。學之以道，其人道；學之以德，其人得；學之以

善、其人善；學之以至道善德、其人到老長、乃復大益善良。故懷要道善德之人、乃名爲帝王之處士、人之第一上善者也、能助君子化者也。其不仕者爲上謹之人。學之人、學之以惡、其人惡；學之以文、其人文；學之以偽、其人偽；學之以巧、其人巧；學之、其中大賢者則巧言、其習書者則巧文、小人得之爲猾民。於子心寧可以教不哉？故夫要道祕德、乃所以承天心而順地意、可以長安國家、使帝王樂者也；而反禁絕、不以力化人、有謫於天、罪不除也。〔起〕天以至道爲行、地以至德爲家、共以生萬物、無所匿、無可私也。故古者聖人象天地爲行、以至道要德力教化愚人、使爲謹良、令易治。今世反多閑絕之、故愚人共爲猾、失天道、不自知爲非、咎在眞道善德不施行、故人多被天譴、當死不除也。〔止〕愚人無道、不避忌諱、遂共犯天地、由不知道德要也。吾之爲書、所以反覆勉勉眷眷者、恐人積愚、一言不信吾文、故復重之也。人俱習爲邪久、或反謂吾可言非也。復令使眞道祕德門絕斷不行、天怒不絕、帝長愁苦、吏民無所投頭足、相隨雲亂、不能相救、試誠冤吾辭於天、正爲解除此制作道也。人人被邪文、愚蒙積久、故常救眞人使出吾道、以付上道德之君、以示衆賢、疾試吾道、乃知吾書之信、與天地相似、不用不試、安知其□□哉？今保吾道不誤、故求試非一卷之文。眞人慎之！」「唯唯。」「行去、常慎吾言、勿自易妄語也。」「唯唯。出之無匿藏、使凡人言語學問、當知得失處、不復妄爲。」「唯唯。」

右解人常所不宜聞所不宜言所不宜用斷邪出眞文

【參考②】『太平經』卷九八「神司人守本陰祐訣」第一百五十六

「請問一大疑事。」「行、言之。」「起」今天師廣開天道之路、悉拘校古者道書之文、以爲眞要祕道。眞道者多善、其文乃入神、故能睹神、與神爲治。所治若神入神、則眞道也。乃多成於幽室、或有使度於室中而去者、或有一出一入未能去者、或有但見神而終古不去者。〔止〕夫度去者、萬未有一人；大壽者、千未有一人也；小壽者、百未有一人也；竟其天年者、比是也。凡天下之人學問也、萬未一人得上官也、千未一人得中官也、百未一人得小官也、其於佞家活生、萬未一人得億萬也、千未一人得千萬也、百未一人得百萬也。凡事者皆如此矣。故其本者衆多、其度世及富貴者少也。愚生甚憂之。今爲道、當以何爲大戒而得長成乎？學問當以何爲大戒而得到大官乎？治生聚財當以何爲大戒而致富乎？今不及天師力問諸疑、恐終古蒙昧、不復開通、無以得知之也。」「善哉善哉！諸眞人問疑事也、天使子來問之。諾。安坐、善問身聽、今爲眞人悉道之、使□□可知、自隨而力記之。」「唯唯。」「行、後世得吾文、爲其廣開眞道之路、必且俱學眞道。夫眞道而多與神交際、神道專以司人爲事、親人且喜善、與不視人且驚駭、與不俱爭語言於人旁、狀若群鳥相與往來、無有窮極。或言人且度去、或言人且富而貴、或言人且貧而賤、或譽旁人、或毀旁人、或使人大悅喜、或使人常苦大忿。夫神、乃無形象變化無窮極之物也。人爲之能專心自守、能不聽其言、考心乃行、閉口不傳其言、又不隨爲其愁怒喜固固堅守本不移、務陰利祐人及凡物、不欲爲害。以年一知道之後、常爲上善、務利而不害傷、求道爲善、到年窮乃止、爲是不敢懈怠、萬萬度世一不耳、萬得大吉一凶耳。如此則群神轉共祐助人也、使人日樂善、不知復爲邪惡也。眞人知之耶？」「唯唯。」「行、子已知矣。行爲眞人道其且亂敗者。人用心意不專純、又易喜易怒、易驚易惑、又易事輕口清辯慧、常欲語善惡、無可能隱匿。遭者欲言、不能自禁止。於其如是、則群神共來欺之。或之小人、則且上入祇言而死也、或數爭辯口而妄言也、或爲鬼神所驚、因而病狂也。大用心意、不專一人、怒喜無常、舉事失正、惚恍無方、或以是失其賢友善輔也、因以危亡。是者大咎在不愛利、爲上則不欲利其下、聽邪神、反欲害之。故賢者使去、反失其賢輔用。其於小人也、不欲尊重其上、反聽邪神詐偽、祇言妄語、是即爲道不成、所以得凶之門戶也、吾不能豫勝記之也。凡人用心、不能專聖密者易營、或皆舉事不吉、所爲多害得凶、其過失積衆多、不可盡言。但爲眞人舉道其大綱、見其端首、使賢明深見吾文、自精詳隨而察之、必已知矣。眞人寧曉不耶？」「唯唯。」「行、子已知矣。守吾文以爲深戒、以爲行者萬世可無凶害、誠□□。故後世讀吾文書、從上到下、盡睹其要意義而行者、萬不失一也。守之不置、自然畢也。專心善意、乃與神交結也。邪心惡意、道必失也。大人不精聽耶、或失其正位、小人不精聽耶、與祇結也。此悉成身之害、不可不大戒慎也。凡人舉事有過、皆自身得之也。夫禍變近從胸心中出、不以他所來也。眞人知耶？」「唯唯。可駭哉！可駭哉！」「子知懼駭、於是可謂已得入眞道矣。愚生已大覺矣、賢儀此以爲行。成事、得長入吉門、辟凶戶矣。死生之路、可

長睹矣。案此爲行、凶耶日遠去、吉者來矣。然子已知之矣、□□不復重戒子也。」「唯唯。」「〈起〉」行、爲子道、學而得大官者決意。凡人學問也、今日入學門、用心專一、常欲祐利愛而不妄語、年少而學至老窮無復知乃止、不樂得官也。但身好學、務欲得知經道、積爲善而不止、行名立、經道成、深知古今災變所從起。其行與學、有益於上、有利於下、爲善積聞、不可闕聞、名聞四遠。明王好之、因而徵索召取、百姓俱言善哉、俱言大吉、是其人也、旁人爲其說喜。是者即其善人學而度世者也。」「〈止〉」真人知之耶？」「唯唯。」「

【參考③】『太平經』卷九八「爲道敗成戒」第一百五十七

〈起〉「行、復爲子說道、其不度者意。今日入學門、不樂思得真道善說；但欲博聞多睹、可以行窮極聖人者、又不樂推行作善、反好浮華之文、可以相欺僞者。或既得入經道、又用心不專一、常欲妄語、辯於口辭、以害入爲職。不尊重上、不利愛下。其行與經道實空虛、未足以爲帝王之良臣、反行守長者。旁人以財貨自助、欲得大官、以起名譽、因而盜採財利、以公趣私、背上利下、是即亂敗正治、天地之害、國家之賊也。民之虎狼、父母之惡子也。天地憎之、鬼神惡之。故其罪泄見者、時時見誅於帝王、以稱天心、以解民之大害也。是其工欺而得官者也。或有用心不專、實空虛無真守、反積常思欲得官。官者、乃天之列宿之官也、以封有德、賞有功也、不以妄予無功之人也。無功之人、天地所忽、神靈所不好愛也。下愚不能深自知惡、反妄思得天官而不止、邪鬼物因而共下其心、使其妄語、因而妖言、不而自禁止也。故時有邪言而死者、此之謂也。非獨爲道、不得其意、則凶也。凡人爲行、不欲樂善、爲悉凶也。真人努力、子幸有善意、常欲愛利爲事、已度矣。」「〈止〉」雖然、真人凡人、且度不度、不在於前也、其失皆在於後、皆由不自愛、自易自言且度、反中有過而不度也。故吾今說而不得中止者、乃真人使吾說不得止也。今欲中閉說而自易不言、恐恨真人。真人恨則上視天、反且使天害吾、故吾言不敢道、自易閉學而中止也。子知之耶？」「唯唯。」「

「行、凡人之得害如此矣。常得於未解、不與本相應、故失之也。子既有大功於天、努力努力。」「唯唯。不敢自易業學而道上也。」「行、子已知自度之術矣、吾無以加之也。行復爲真人具說、其人樂治家畜財、得富貴者、年少力能布作、而長思爲事、力盡因乃止、能揚善隱惡、常用心樂爲善、慄慄思尊上。凡疑悉慎戒之、不敢妄爲、又愛下不欲害人、不枉王法、不樂隨邪禮相隨飲食也。凡不急之事、不敢與焉、有知而爲此行、到老無知乃已。雖實若虛、口不輕語、故能致珍物畜積、因以成人也。夫人賢不肖、用意各異。或有不善之人、輕上害下、好從邪禮、不急之行數到、市道用口妄語不能忍、非即凶亂危亡之人也、非爲道也。子知之耶？」「唯唯。」「是故夫爲道者、專汝心、閉汝口、毋妄言也。是故〈起〉」古者聖賢、睹天法明、故能行道守德也。天乃專一、晝夜行道而不言、故能獨吉也。地乃晝夜行道而不言、愛養萬物、故能長獨安也。四時乃獨行道、晝夜不止、故能常獨興王而不止也。三光乃獨行真道而不言、故能常明、隨天運行也。五行乃獨行真道而不言、故能與天地爲常也。凡天下之爲道行者、象此不可勝書也。故能愛利、口不妄言、則道可得也。欲輕忽事、反吾文言者、成□□爲道所賊、萬不失一也。」「〈止〉」真人既遠來問疑、故以戒子也。得書思之惟之、吾不負子也。」「〈起〉」吾乃爲天談、以戒上德之君。夫德君天與之、必且好道、百姓且象其君而爲之、皆以此文爲大戒。」「〈止〉」則可得吉而遠凶也。出此之書、以戒下愚、慎毋藏之。」「唯唯。行去。此說戒乃若小而反大、若薄而反厚。何謂也？」「然、念其辭言也若小耳、其戒反大也。念其言、若類似俗辯士所爲也、則似薄不足傳也。念其戒人成人則厚矣。故念吾爲真人作道、其大也則洞至無表、其小也則洞達無裏、尊則極其上、卑則極其下。故上及神人、下及奴婢。所以然者、欲使大人爲之亦言足、小人爲之亦言足、賢聖爲之亦言足、百姓爲之亦言足。」「何也？願聞其意。」「善哉！子之難也、得其意。然吾乃爲太平之君作經。夫太平之君治、乃當象天爲法、不可若小國、但長於一界也。」「

「〈起〉」是故天之爲象法也、乃尊無上、反卑無下、大無外、反小無內、包養萬二千物、善惡大小、皆利祐之、授以元氣而生之、終之不害傷也。故能爲天、最稱神也、最名無上之君也。今上皇氣至、德君治、當象此爲法。故吾道一高一下、一沈一浮、欲使衆賢共察之也。是故東南地戶、乃有柱天之水、不逆小流之力也。善惡大小皆歸之。真人知之耶？」「〈止〉」唯唯。」「行、欲復說辭無極、爲其大文、且小止息、各歸思之於胸臆。作道不得其意、示之以南反問北。用心如此、則終古所學不得也。不敢不行、子已曉矣。」「右集難道戒學治生成與不成吉凶所起訣